



左写真は工房で作品とともに福田さん。
右端のカゴはヨガ用のマット入れ。

漆工房「皎月(こうげつ)」
☎ 090-9972-7752

漆の魅力を、

interview

日常使いのモノを通して伝えたい

ものづくり・漆工芸作家 福田奈々子さん



ペーパーボックスに漆を
塗る作業

昨年11月、西武柳沢駅近くのギャラリーSPACE KOH(スペースコウ)で催された福田奈々子さん(33歳)と注染作家との二人展を見に行った。福田さんの作品は漆塗りの美しいツヤを放つまめぼんやおしゃれな一輪挿し、カゴバッグ、軽石に色漆を塗ったもの。斬新でどこか温かい漆の世界に目を見張らされた。

東京芸大卒業後、神社仏閣や文化財の修復に携わる

福田さんは狭山市生まれ、2歳の時から清瀬市で育った。両親とも教師だったため、保育園時代から親の迎えを待っている間、絵を描いたり、工作したりするのが大好きな子だった。福田さんのものづくりの原点はこの頃にありそうだ。小・中学校でも絵や習字は作品展に出品され、賞をとったりしていた。

三鷹にある明星学園高校から一浪して、東京芸術大学工芸科へ。浪人中美術系の専門予備校で集中的に勉強したことで、自分の実力が伸びるのを実感したという。「その反動なのか燃え尽き症候群か、大学の4年間はのんびりしていましたね」と笑う。2年の後期に漆を専攻することにした。先輩の漆作品展示を見て影響を受けたこと。そしてその頃海外へ旅に出る度に、日本人としての我が身を振り返っていたせいもあるとか。漆器のことを英語で「laccery」というように、漆器は日本を象徴する工芸品。「せっかくだからもっと日本のことを勉強しよう。日本にカぶれてみよう」と漆を学ぶことにした。

た。ほとんどが男性で、女性は数人という仕事場だった。「漆に関わられるめったにない機会」と張り切った福田さんは最初の1カ月、朝の4時に清瀬をでて鎌倉へ通うという日々を送っていたが、さすがにきつく、大船にアパートを借り、1年間、第1期工事に携わった。

この会社には上野にある東京国立博物館内に漆工修理室もあったので、重要文化財などの美術工芸品の補修にもあたった。古来より受け継がれてきた日本の宝を、それ以上劣化させないための細かな作業。顕微鏡で見ると、3センチ四方をクリーニングするのに1日がかかりという、気が遠くなりそうな世界だ。

「建物の大きな仕事から、顕微鏡を駆使してやる細かな仕事まで、漆の幅広い可能性を肌身で感じられたことは大変貴重な体験でした。修復、補修するというのにはある意味で破壊的行為ですが、そのはがした層や下から出てきたもので、先人の知恵や苦勞が垣間見える。漆は表面の層だけを見られがちですが、何度も塗って研いで磨いてを繰り返す、それこそが漆の真骨頂。そして、日本の漆の神髄だと思います」

独立して、漆工房「皎月」を開く
それまでのルーティンワークから「自分のものをつくりたい」と一昨年、本格的な制作活動をスタートさせた。

練馬にある祖母宅の別棟を借り、工房を構えた。清瀬から毎日通って、ものづくりに励んでいる。

工房はマンシヨンの間にひっそりと、そこだけ昭和が残る風情ある木造の平屋。屋根の高さの倍以上あるビワの木は昔、おばあちゃんがタネから植えたものだとか。壁を自ら漆喰に塗り替え、押し入れは作品展示のギャラリ―にリフォームした。隣の部屋の押し入れは漆を乾かす室（むろ）として活用している。

漆の難しい点は何といってもあのツヤをだすことだという。下地、中塗り、上塗り、研いでは塗りを繰り返し返

す。乾燥させるのに最適な環境は気温20度に湿度60%。梅雨時は早く乾くけれど冬場はなかなか乾かない。漆を塗った表面は素人が見ると平面に見えるが「若干、ふっくらさせて仕上げると完璧な面をつくりたいと、漆の穴にはまってしまう。その穴が深いので、漆には人を落とす穴があると思えます」縄文時代からの自然の贈り物には魔力が潜んでいるようだ。

最近では身近で気軽に使えるものをと、手芸用のクラフトテープ（紙バンド）でカゴを編み、その表面に漆を塗っている。さまざまなデザインのカ

ゴは、近くでよく見ないと竹で編んだカゴと見分けがつかないほど。

取材の日は編んだペーパーボックス2個の表面に漆を塗る作業だった。漆の木から採った本漆は薄茶色をしている。埃などをとるため、ウマと呼ばれる漆漉し器で漆を浸したこし紙を絞る。するとポタッポタッと漆が落ちてくる。「漆の一滴は血の一滴なんて言われます。一滴たりとも無駄にしちゃいけないと」。クスノキオイルで希釈した漆を刷毛で箱全体に塗っていく。人の毛髪で作られた漆刷毛は大きいサイズで1本、10万円もするとか。人毛を櫓の薄板で包みこんで作られ、削り

ながら長年使い込んでいくもの。漆も伝統工芸なら、その道具も匠の技だ。

漆に限らず、自然の産物からものづくりを楽しんでいる。拾ってきた木の実や枝は、福田さんの手にかかるとステキなリースに変身する。松ぼっくりなどは焼いて炭にしている。開け放たれた工房がそんな制作にびったり。暮らしを大切に紡ぐ福田さんとハーモニ―を奏でている。「百見は一体験にかず。私はこの、一体験をいろんな人にプレゼントしたい。うるしの「う」の字だけでもいい。うるしの、そして手仕事の親善大使でありたいと思っています」

（清瀬市在住）